



© Yūki Nakase

春の日差しと42丁目



中瀬有紀

新しい始まり

打ち合わせと劇場下見で訪れたマイアミから週末の夜に帰ってくると、ニューヨークの家は一変していました。私がマイアミへ発った直後に春の大雪がニューヨークを襲い、大家さんは「来週水曜日まで停電かもしれない」と言っています。マイアミでの打ち合わせに間に合う飛行機に乗るため、午前3時に家を出たとき、ちょうど雨が雪に変わり始めていました。前日の郵便物が入ったままだった郵便受けをちらりと見たけれど飛行場に行くほうに気をとられ、帰ってから受け取ろう、とほったらかしにした郵便物は、倒れた木が直撃して郵便受けから飛び出し、びしょぬれになって雪に埋もれていました。翌朝、明るくなってから窓の外を見ると、つい2、3日前まで立っていた木々が何本もなぎ倒されています。春の嵐をたまたま回避して、こうして今も生きていることは偶然なのかもしれない、と感じています。

先日、照明デザインをさせていただいた演劇『サン・ルイス・レイの橋』も今回の春の嵐で三公演がキャンセルとなりました。悪天候だけでなく、劇場の位置する地域一帯が停電したことが理由です。ソートン・ワイルダー氏原作の同小説をデイヴィッド・グリーンズパン氏が戯曲化したこの劇中にも、生きてくることの偶然について語られました。ペルーのクスコを訪れていた5人の旅人が、インカ帝国時代に建設された吊り橋の落下によって死亡する事故をめぐる人々の想いを語ったその演劇では、どうしてあの5人が事故現場に居合わせ死に選ばれたのかと観客に問いかけることから幕が開きます。愛する人を失った寂しさから自殺を図るも未遂に終わり、生きることを選んだその数日後に事故にあって命を落とす男性や、娘の愛し方を模索した母親がこれまでの過ちに気づき「もう一度生きよう、もう一度人生をやり直そう」と誓った数日後に事故で

命を落とす女性がその5人に含まれています。事故で亡くなった5人のことはいずれ忘れ去られるけれど、彼らが愛されていたことは事実で、「思い出すら愛を証明するのに不必要だ」というワイルダー氏の言葉がずっと心に届く、素晴らしいグリーンズパン氏の脚色でした。

『サン・ルイス・レイの橋』の公演では、大きな橋の装置もなく、旅人が橋から落下する場面も再現しませんでした。理由は、どんな巧妙な特殊効果を使った橋の落下を劇場内で見ても信じられないためだと、グリーンズパン氏は笑いながら話します。それよりも、事故の瞬間のフラッシュバックのほうがより現実的です。以前、交通事故を目撃したとき、男性が車にひかれる瞬間からその車が走り去る瞬間までが16コマのサイレントフィルムのように、それは写真を撮る感覚と同じでした。

演劇に関わりたいと思うのは、人は死ぬという哀しい事実に立ち向かっていきたいからかもしれません。特にニューヨークという街は死の感覚を忘れさせます。早歩きで急ぐニューヨーカーも道に座る物乞いも皆若く健康そうで、ホットでヒップな新しいレストランやバーに夜な夜な集う人たちも、地下鉄構内で歌やダンスを披露する人たちも病気ではなさそうです。もちろん、個々に秘める問題があるのでしょうが、そういった負の側面はニューヨークの煌めきによって隠されています。

日本の4月は新年度ですね。新しい始まりです。私にとって照明デザインの仕事は、他人の人生に触れる機会となり、また彼らの人生を通じて自身の人生を振り返るきっかけとなっています。生かされていること、そして好きな仕事に没頭させていただける今このときへの感謝の気持ちだけは確かです。